

「出あい」とその臨床性について

—その意味ともたらすものの探求—

岩井 有香

臨床心理士として、そして教師として多くのクライアントや子どもとの「出会い」を重ねてきた。その中で、強烈な印象を残しているいくつかの「出会い」がある。

遠足の帰り道、教師であった筆者は、クラス担任の児童と歩いていた。にぎやかにおしゃべりする筆者と子ども達。Aちゃんだけは、黙って歩いている。昨年度までいじめられていたと引き継がれたAちゃんを気にしつつ、筆者は他の子ども達の話に耳を傾け、話しかけ、歩く。一人、また一人と子ども達は家路に向かい、とうとう筆者は、Aちゃんと二人だけになった。一生懸命話しかける筆者、曖昧なほほ笑みを浮かべたり、言葉少なく答えるAちゃん。どこか居心地の悪い感じを持ちながら、夕日の中をAちゃんと歩き続ける。ようやくAちゃんの家が見え、気まずさを打ち払うように一生懸命しゃべっていた筆者がほっとしたその時、

「先生、私な、いじめられててん。私な、わがままやから。」

Aちゃんは、しっかり筆者を見て、笑いながら言った。その表情は、普段のAちゃんとは全く違っていたこと、そして、いじめられていたという引継ぎを受けて、これまで何かとAちゃんに声をかけたり、いじめのことをさりげなく聞こうとしたりしていたが、何も聞けなかった筆者は当惑し、<えっ、ああ、しんどかったね。>と答えるのが精一杯だった。筆者が次の言葉を紡ごうと考えているうちに、Aちゃんの家の前に着き、「じゃあね、先生。」とにつこり笑ってAちゃんは、家の中に消えていった。一人取り残された筆者は、<なぜ？><今？>と考えながら、Aちゃんが消えた扉を見つめていた。

その次の日、筆者はAちゃんが言った言葉の続きを聞こうとした。しかし、Aちゃんは、いつもの困ったような、曖昧な笑みを浮かべるだけだった。この後、Aちゃんとの間で、この「出会い」が話題に上ることはなかった。

1. はじめに

学校教育、心理臨床、保育、看護等、対人援助分野においては、人と人の「出会い」が大切にされている。特に、心理臨床においては、神田橋（1984）が、心理臨床の面接の本質は二人の人間の『出会い』であると述べるように、セラピストとクライアントとの1回1回の「出会い」が基本となっており、「出会い」という言葉は幅広い意味でよく使われている。学校教育等其他の分野においても、「出会い」という言葉は、それぞれの分野の文脈でよく使われる言葉であ

る。しかし、それ故に、セラピストとクライアント、教師と子どもといった関係の中で起きる様々なものが、「出会い」という言葉に収斂されてしまっている感も拭えない。ボルノー(1966)が、出会いという言葉のそれ自体の意味を問うことは無意味であり、ある特定の連関の中で、それがどのような意味を持つかということに意味があると述べているように、広い意味で「出会い」を考えるのではなく、心理臨床や学校教育等において個別に生じている「出会い」を深く考察するところから出発していく必要がある。

学校教育における「出会い」は、一人の教師と多数の子どもとの「出会い」が基本であり、「出会い」が意識される場面は限定的である。まず、“出会いの3日間”“新学期最初の出会いを大切に”といった言葉に見られるような、教師が担当する子どもと初めて出会う「出会い」である。この「出会い」では、「印象的な出会いの演出」(加藤, 2001)と「一人ひとりの子どもたちがどんな思いでいるのかつかむこと」(渡辺, 2001)が大切にされており、その後の良好な関係形成や指導の手がかりにつながるものという意味での「出会い」である。次に、「新たな子どもとの出会い」「教師と子どもの出会い直し」といった言葉に見られるような、今まで気づいていなかった子どもの新たな面に気付くといった意味での「出会い」であり、子どもの理解が広がったり、深まったりするとされている(春日井, 2002)。また、学校教育に心理臨床の考えや手法が取り入れられるようになってからは、学級経営や人間関係づくりに活かしていくためにカウンセリングマインドやエンカウンターを考え方を取り入れた「出会い」も重視されてきている(水上, 2016、國分, 1999)。このように学校教育において「出会い」という言葉は、それによって「子どもを知り、理解する」「子どもと教師の教育的関係形成や指導に役立てる」という意味合いが強いといえよう。

筆者は、これまで教師として多くの子どもと多くの「出会い」を重ねてきた。日々の「出会い」は、筆者の中に折り重なったり、上書きされたり、時には忘れられたりしながら、「出会いのアルバム」が織り成されるように蓄積されてきた。しかし、筆者の中には、この「出会いのアルバム」には収まらない、いくつかの「出会い」がある。それらは、瞬間の出来事でありながら、衝撃的であり、これまでの相手との「出会い」の文脈には収まらない「出会い」であり、クロノスのような流れを断つカイロスのような一瞬であった。ロジャーズは、人々が日常生活で経験するよりはるかに密接で直接的な関係を結ぶ「出会い」を“基本的出会い(encounter)”としたが、それとも異なる一より瞬間的で、意図も予想もせぬところで起こり、意味もわからない「出会い」であった。冒頭に上げたエピソードのような、その一瞬立ち止まり「出会った」子どもについて考えたが、その時点では、「出会い」によって子どもの理解が広がったり、関係が深まったり、指導に活かせたりすることはなく、教育の分野においては扱われてこなかった「出会い」の体験であった。子どもと対面し、話していたという点では「出会い」であり、思いもかけない時に遭遇したという点では、「出遭い」や「出遇い」でもあり、どこか子どもとぴたっと合ったような感覚であったことから「出合い」でもあったといえる。そのような多様な色合いを持つこの「出会い」を仮に「出あい」とする。一丸(2000)は、「クライアントと会ってはいても『出会い』が生じていないこともあり、「出会い」こそが心理療法の核である。」と述べているが、心理臨床をはじめとした様々な分野で述べられてきた「出会い」の中に本論文で述べる「出あい」も含まれており、「出あい」を探究することによって、学校教育において

子どもとの関わりの核となるような新たな示唆を得られるのではないだろうか。

このような筆者の疑問を出発点に、本稿では、学校教育の場においてこれまで取り上げられてこなかった「出あい」の様相と、「出あい」がもたらすものについて心理臨床的に考察することを目的とする。第2節では、導入として「出会い」について概観する。第3節では、筆者の事例研究（岩井,2015）の結果見出された「出あい」の様相について述べる。第4節では、心理臨床においてこれまで述べられてきた「出会い」から「出あい」についてさらに考察を深める。第5節では、「出あい」における教師と子どもの関係性変容の可能性について考察し、第6節で、本稿のまとめと今後の展望について述べる。

2. 「出会い」とは

そもそも、人と人が「会おう」とは、どのようなことなのだろうか。前述のボルノーは、「なんでも随意的な人間的ふれあい、なんでも人間的邂逅が、それだけですでに出会いだというのはない。そうではなくて、厳密な意味で出会いと名付けられるものは、ただ、比較的にまれな、しかしまた決定的な事象のみである。」と述べる。人と人が同じ時、同じ場所にいたとしても、それを全て出会ったとは言わない。双方が互いに意識することがなければ、出会ったではなく、「同じところに居た」というべきであろうし、片方が相手に注意を向けたとしても、相手が注意を払っていなければ、それは「見た」「見かけた」「気づいた」等と表現されるべきであろう。双方が互いを意識し、向き合う場合において、人と人は「会おう」ことが出来ると言えるだろう。しかし、我々は日常生活において、双方が互いを意識し、向き合っている状態を常に「会おう」とは表現しない。多くの場合は、「会う」と表現される。誰かと初めて会った時や思いもかけないような場所で会った時等、日々繰り返される「会う」に、日常とは違う意味が付与された時、「会おう」という言葉が使われてるといえる。広辞苑によると「会おう」には、①出て行ってあう。出迎える。②出て立ち向かう。出て行って争う。出ていって相手となる。③偶然に人やできごとに合う。行きあう、出くわす、遭遇する。④符合する。ぴったりあう。⑤道と道とが交差する。また、道と道とが合流する。の5つの意味が書かれており、「会おう」の他にも、「出逢う」「出合う」「出遇う」「出遭う」とも表記出来る。このことから、人と人が「会おう」ということには、今ある状態から「出る」という動きや偶然性、また何らかのものが一致する、関係するといった要素があることがうかがわれる。

「出会い」におけるこれらの要素については、従来から論じられている。プーバーは、人と人が、“我”と“汝”として相互的に会おうことを真の「出会い」とした。そして、「真の出会い」においては、認識主体と対象、能動と受動の区別は曖昧となり、このような関わりによって、日常の世界に変化が生じるとしている。前述のボルノーは、「出会い」には、常に“向かって”という動きが含まれているとしている。そして、「出会い」には、“わたし”に出会いうるのは、ただ、そのつど、ただ一人の“汝”であり、そのことによって、他の全ての“汝”との出会いが排除されるという排他性が特色としてあるとしている。荻野(1979)は、「出会い」は、ただ単に「会う」ことではなく、固有の自分の世界から出て、同時的に相手もまた、自分固有の世界から抜け出して、自分とは異なる世界に生きている他者の存在に気づき、この事実に驚くことであると述べている。このように、「出会い」とは、互いが、それぞれの自分固有の世界、

また、その他の人々との日々の出会いから出て、同じ地平に立つ人と人として向き合った状態、相互的な意味で出会う驚きを伴ったものであるという点が強調されている。

「出会い」が相互的であるということは、「出会い」の偶然性の一因となっているだろう。「わたし」が、いくら相手と出会いたいと望み、意識的、意図的に動いても、「出会い」の本質が「相互的」なものであるならば、それだけでは「出会い」は生じ得ない。「出会い」を生じさせる可能性のある「わたし」の動きと、同じく「出会い」を生じさせる可能性のある相手の動きが、偶然にも交差した時、「出会い」は生ずるといえ、偶然性をはらまざるを得ない。「出会い」の偶然性については、プーバーも言及している。“我”と“汝”の真の「出会い」は、目の前の相手を“客体”“手段”として見る「我」と“それ”的關係の中に、「突如、すばらしい抒情的、劇的挿話のように」、不確実性をともなう生じ、「出会い」は、「神の恩寵」として捉えるべきものであり、我々は、それを待つしかないとしている。

つまり、「出会い」の本質とは、それぞれ固有の世界から出た人と人が、交差するように相互的に向き合うことであり、それは、突如、偶然、驚きを伴って生じるものといえよう。

3. 学校における「出あい」とは

筆者(2015)は、筆者の体験したいくつかの「出あい」の事例をピネット形式で取り上げ、「出あい」の様相を描き出し、「出あい」とは何か考察した。

この研究の結果、「出あい」は、教室や授業等、構造化された学校空間の枠から外れた場所や時間で起きており、非日常性、境界性を有したものであることが明らかになった。境界とは、「さかい」や「区域」を意味する言葉であり、一般的には土地や領域を区切る時に使用されるが、多分に心的に創造されたものであり、線から空間までが含まれており、固定されない自由さを持つとともに不明瞭さや曖昧さが不気味で、不安を喚起するという両義性と多大な可能性を含む空間であるとされている(児玉,2006)。赤坂(1992)は、中立的な周縁の領域を境界とし、「・・・境界上にたつて世界を眺めることによって、明/暗の逆転した因果にも似た光景にであうことになる。“昼の世界”が自明なことがらとして退ける、さまざまな隠された現実が、薄明の闇に限どられ、浮彫にされる。」と述べ、境界は空虚であるが、それ故に多義的な意味にみたされた場であると述べている。構造化された学校の中にも“境界”は多く生じる。普段使われていない教室、校舎の裏、放課後、教室移動の際の僅かな時間……。そのような境界の「出あい」によって、構造化された学校教育における子どもの理解においては、目を向けてこなかった、もしくは、気付かなかった新たな子どもの姿に教師は「出あう」ことが出来ると言える。田中(2013)は、“境界は生じる”という視点を提示し、「異」なるものの体験が生じるところに境界が生じ、その境界のあるところにあらたな地平に立つ<わたし>や世界が生じてくるのである。心理臨床においては、その都度生成される境界に身を置くということを意識しなければならないだろう。」と述べている。つまり、学校空間に生じる境界を捉え、そこに身を置こうとする態度なくしては、境界が可能性と多義的な意味をもった空間とは成り得ず、新たな「出あい」は生じないとの結論を得た。

また、この研究では、「出あい」においては、教師は意図せず「教師」という役割から外れ、教師と子どもが「教育する教師—教育される生徒」という関係から一時的に解かれた状態で生

じていたということも見出された。

さらにこの研究では、「出あい」は偶発的に起こり、非常に短いものであるという結論も得た。前川（2010）は、セラピストやクライアントの意図や枠を超えた所で生じる“偶発事”について検討し、“偶発事”は破壊性を持っているが、大きな転機として活かされていくなれば、強い力を持つと述べている。川寄（1998）も、治療が滞って行き詰っている際に偶発的に“ハプニング”が生じて治療が進展する事例を示し、心理療法における“変化”と“ハプニング”は密接なつながりを持っていると述べている。両者が述べるように、偶発的に生じる「出あい」は、危険性をはらみながらも、大きな力を持ち、現状になんらかの変化をもたらす可能性があるものといえるであろう。しかし、偶発的に「出あい」は、必ず「出あい」は生じるわけではない。川寄は、「“ハプニング”の内容ではなく、それが起こった瞬間に治療者に開かれていなければならない。」と述べている。偶発的に「出あい」が生じた際、そこに向き合える開かれた態度が大切なのである。河合（2014）は、共同体にあって、習慣化された行動をしている時は、意識的なあり方をしているのではなく、むしろ無意識的であろうと述べている。そこで生じることは全て決まったことで、そこからは物語は生まれないという。そして、異質なものに突然にであう瞬間にしか意識は生じず、その意識はひとときで、またなくなってしまうと述べる。偶発的な「出あい」は、これまで無意識的なあり方で接していた子どもに対する「意識」を生じさせるが、その「意識」はすぐ消えてしまうものであるといえる。また、河合は瞬間の遭遇の間にファンタジーが生まれてくることで、境界が延長され、長い物語の可能性が生じ、物語が長くなるとそこにさまざまな感情が生じてくると述べている。つまり、偶発的、瞬間的な「出あい」にとどまり、向かい合い、「出あい」が示すものを逡巡することで、瞬間であった「出あい」が延長され、新しい子どもの“物語”がうまれてくるといえる。ボルノー（1968）は、出会いにおいて不意に立ち現われるものも、“わたしやわたしのくわだて”には依存しない、偶発的なもの、予見し得ないものであると述べている。「出あい」は、短く、偶発的に起こる瞬間の出来事だが、「出あい」の瞬間だけでなく、「出あい」が過ぎ去った後も向かい合い、逡巡することまで含めてこそ、これまで予見しなかったものが自身のなかに生じ、「出あい」が意味を持つてくると言える。

この研究で明らかにされた「出あい」の要素—構造化された時間、場所、役割から「出る」ということ、突如、偶然おこり、そのことに向き合うということ—は、前節で述べた「出会い」の本質と通じるものである。

この研究において、「出あい」は、これまで関心が向けられていた学校における教師と子どもの「出会い」とは異なる臨床的な意味合いを持った「出あい」であり、これまでの枠組みには収まらない子どもの理解や関係性の構築につながる可能性があるとの結論を得た。しかし、関係性がどのように変容するか、また、そのことの心理臨床的意味、そして、構築した関係性を学校教育における教師—子ども関係とどのように関連づけて考えれば良いかについてはこれだけでは考察できない。そこで、次節では、その手掛かりを得るために心理臨床における「出会い」に関する先行文献から「出あい」についてさらに考察する。

4. 心理臨床における「出会い」

はじめに述べたように、心理臨床では、面接の本質は二人の人間の「出会い」であるということが強調されている。しかし、全ての面接、面接の全ての時間が、本質的な「出会い」となるわけではない。井上(2010)は、心理臨床の過程においては、重要な意味を持つ奇跡的な「出会い」の瞬間を待って、無数の出会いを繰り返す必要があると述べている。繰り返す出会いの中に突如これまでとは色合いの違う「出会い」が訪れるという経験は、多くの心理臨床家が体験しているのではないだろうか。樽見(2006)は、このような「出会い」を、“素の時間”と表している。それは、幻聴、妄想がひどい入院患者の「ただ一度の昔語り」を聞いた時間であり、「決して別人になった感じを与えるわけではないが、一瞬雲間が切れて向こうの風景が流れている（くる）、あるいは弱い電波に一瞬チューニングが向かい合い、音が流れている（来る）ような印象を受ける」時間であったと言う。松本(1987)は、このような「出会い」を“接線の触れ合い”と述べており、馴染みと思っていた患者に一瞬の意外性を感じる瞬間であると述べている。ロジャーズは、ミシガン大学でのブーバーとの対話において、“我” - “汝”の関係と、治療関係において効果が及んでいるとみなす瞬間に共通するところがあると述べている。セラピストが、検査者や科学者などといった者としてではなく、一人の人間として主体的にクライアントとの関係の中に入っていく感じであり、「透明」になってクライアントがありのままの感情を抱いたり、ありのままの態度を有していることに喜びを感じるということであり、クライアントの体験を相手の内側から感じられる瞬間であると述べている。そして、そのようなセラピストの態度をクライアントが感じる事が出来れば、「人間と人間との本当の出会い」が経験されるという。そして、その「出会い」の結果として、セラピスト、クライアントの双方が「相互的」に変化するとしている。これに対してブーバーは、援助関係における「出会い」はどこまでいっても対等であることは考えられないと反論している。セラピストとクライアントが、互いに対して等しく、同じ平面にあるという意味での「単なる人間性」には限界があり、治療関係における「出会い」でのセラピスト、クライアント両者の役割の相違を指摘し、それにとどまる必要性を説いている。ロジャーズは、面接全体に関してはブーバーの意見が当てはまると認めつつも、「・・・本当の変化が起こる瞬間においては、私がその瞬間に相手をありのままに見ることができ、また相手も、理解され受容されているということを真に感じる・・・そして、これこそがおそらく変化を創造するものののだらうと思います。」と述べ、治療に効果的な対等な基盤の上での「二人の人間の出会い」が「瞬間的」であることを強調している。

つまり、心理臨床の面接において心理臨床家に驚きや意味をもたらす「出会い」は、非常に瞬間的なものであるといえる。そして、その「出会い」は、心理臨床家とクライアントが日々出会いを繰り返し築いてきた関係性の上に、偶然に訪れるものであるようである。筆者はある老年期に入った女性との面接で次のような体験をした。彼女は、面接で常に気丈に前向きに、家族関係で苦労した半生を語り続けた。筆者は、彼女の語りの奥にある気持ちに触れられない感じを抱きながら会が続けていた。その面接でも彼女はいつものように苦労話を語っていた。しかし、その語りが突如途切れた。そして、彼女は、「・・・でも、今ならわかりませんよね。今なら、自由ですもん。」と夢を語る少女のように言った。筆者は、雷に打たれたような感覚をおぼえた。初めてその方の気持ちというよりは、生のその方に触れたような感覚であった。し

かし、その感覚が筆者の中でこだましているうちに、彼女はまたいつもの語りに戻っていった。このように、「出会い」は瞬間的であり、また予期せず偶然生じるものであるため、心理療法家は驚き、その場に佇んでしまう。何か新しいものがひらけるような感じを受けるが、それを理解したり、意識的に扱ったりすることは、なかなか難しいことのようにである。さらに、この「出会い」が、彼女との間で再び話題になることはなく、筆者自身からも話題にすることも出来なかった。前述の樽見は、“素の時間”の何日か後、患者とこの時の話を再度しようと試みるが、患者は戸惑った様子を見せ、樽見は非常に居心地の悪い、一人取り残されたような感じを受けたという。「出会い」の瞬間は、その時ふれることが出来ないだけでなく、「出会い」の後も、直接的に取り上げることは難しいことのようにである。つまり、この「出会い」は、日々の「出会い」の延長線上で理解したり、扱ったりし得ない出来事といえよう。それでは、この「出会い」をどのように理解し、そこにひらけていけばよいのだろうか。

ボストン変化プロセス研究会（以下 BCPSG）は、「解釈を越えて - サイコセラピーにおける治療的变化プロセス -」(2011)において、“変化を触媒する治療的出会い”を、“present moment(現在のモーメント)” “now moment(今のモーメント)” “moment of meeting(出会いのモーメント)”という3つの段階を進んでいくプロセスとして捉えている。

“present moment”は、“今ここで二人の間に何が起きているのか”の感触をつかむことができる時間であり、対話的やり取りのユニットであり、その内容は比較的一貫しており、感情はそれ程起伏なく、“ゴール”に向かって一定方向を保つとされ、習慣的な動きのテーマを繰り返す。ゆえに、治療テクニックの性質、セラピストとクライアント相互のパーソナリティ、問題となっている病理などによる影響が大きいと述べられている。

“present moment”が時として、情動的に“ホット”になり、非日常的な雰囲気を作りあげた時、それが“now moment (今のモーメント)”である。“now moment”は、特別な“present moment”であり、主観的・情動的に“火がぼっと灯った感じ”で、人を現在へとどっぷり引き入れるものであるという。このような感じを受けるのは、“now moment”において、習慣化しているセラピスト-クライアント関係の枠組みが突然変容するか、変容しそうになるからとされている。

“now moment”は、“present moment”とは違い、注意の集中を求め、当たり前になっている習慣的枠組みにとどまるかどうかをめぐり、何がしかの選択を迫る。セラピストにもクライアントにとっても、その形、そのタイミングでの“now moment”はなじみがなく、予想外であるため、何が起きているのか、どうしたら良いのか、見当がつかず、自身の枠組みにある行動プランや説明で対処できるものでもないが、未知の未来を秘め、行き詰まりとも、チャンスともとれると述べられている。

“moment of meeting”とは、進んでゆくプロセスで新生してくるものであり、それが間主観的な環境を改変し、いずれは関係性をめぐる暗黙の知の変容につながるという。暗黙の関係に変化が起こるというこの相互的なプロセスは、過去の共感不全を修正することはないし、過去の欠損を埋め合わせすることもないが、何か新しいことが関係の中で生まれ、それが間主観的な環境を改変するとされている。変化のきっかけとなるような“moment of meeting”は、いつも通りの治療の進み方からは外れているという感触によって特徴づけられ、それまで通りの枠組みでは説明することも、理解することもできないものであるとしている。この“moment of

meeting”は、“治療関係において効果が及んでいるとみなす瞬間”によってセラピストとクライアントの関係が変容し、治療が促進されるというロジャーズの考えにも通じるものと思われる。“moment of meeting”は、突如生じるものではなく、普段の分析作業を表す“present moment”や、変化を予期させるような“now moment”というプロセスを経て生じるとされている。

BCPSG のこの考えは、面接室において日々繰り返す出会いと、突如訪れる「出会い」を考える上で大いに参考になる。“present moment”は、面接において、セラピストとクライアントとの間で頻繁に繰り返される、非常に馴染み深い、日常的な出会いと言えるだろう。そして、繰り返される出会いの中に突如として訪れる瞬間的な「出会い」は、“now moment”の様相と非常に似ているように思われる。“now moment”が“moment of meeting”へと進む上で、欠かせない要素がいくつかあるという。まず、セラピストは、セラピストとしての態度や知識、技法で対応するのではなく、個人としての側面を使わずには済まされない。なぜなら、“moment of meeting”においては、二人は、その瞬間、通常の治療上の役割から出て、人間同士として出会っているからである。また、“moment of meeting”を構成する行為は、型通りの、習慣的、技法的なものではなく、そのモーメントの非凡性に見合う、新奇なものが必要とされる。さらに、“moment of meeting”によって、二人に特有な新しく創造された二者関係であることを思い起こし、確認できる視点も必要であると述べられている。

BCPSG は、“now moment”は、見逃されたり、うまくキャッチされなかったり失敗に終わることも多いと述べる。しかし、失敗に終わった“now moment”も、そこに留まり、立ち止まることで修復され、“moment of meeting”となり得るとしている。つまり、これまでにない「出会い」が生じた瞬間に身を置くだけでなく、「出会い」の時間が過ぎ、再び馴染みのある「出会い」の時間に身を置きつつも、「出会い」にとどまり、「出会い」について考えることまでを含めて、心理臨床的な意味のある「出会い」となると思われる。BCPSG は、この「出会い」において、“present moment”に生じる“now moment”を的確にキャッチし“moment of meeting”に変化させること、そのことで暗黙の関係が変容し、それが治療的であることを強調している。それゆえ、心理臨床家は、「出会い」においてどうしたら良いかということに関心を向けたいだろう。しかし、これまで述べてきた「出会い」の特質からすると、心理臨床家にとって大切なことは、「出会い」が生じた瞬間に身を置き、とどまり、「出会い」が閉じた後もそれを抱え続けるという「出会いに」ひらかれた態度ではないだろうか。

5. 「出あい」における関係性変容の可能性

前述の BCPSG は、「出会いのモーメント」の最中に関係性をめぐる暗黙の知に変容が起こるという見方は、治療的变化を考える際、新しく有用な視点の可能性を開くと期待される。」と述べているが、学校教育における教師と子どもの「出あい」を考える手がかりにもなるのではないだろうか。筆者の述べる「出あい」は、いつも通りの教師—子ども関係の進み方からは外れているという感触によって特徴付けられる斬新な出来事であり、それまでの枠組みで説明、理解が出来ないという点、二人の関係性を変容する可能性があるという点において、“moment of meeting”と共通点が多いといえる。しかし、「出あい」が、瞬間的、偶発的であること、その時点では理解も扱いも出来ないという点では、「なじみがなく、予想外で、何が起っているの

か、どうしたら良いのか、見当がつかない” “now moment” により近いと言えるだろう。このように考えると “present moment” は、構造化された学校空間において、教師と子どもという関係のもとに、ゴールに向かって日常的に繰り返されるやりとりや、一貫した教育的理解と考えることが出来るだろう。学校における「出あい」にも、教師と子どもの関係性をめぐる暗黙の知に変容を起し、新たな関係性を構築する可能性があると思われる。

しかし、学校における教師と子どもの「出あい」が引き起こす関係性の変容と、面接室におけるセラピストクライアント間の関係性の変容のプロセスを全く同じものとして考えることは出来ないであろう。面接室におけるセラピストクライアント関係は、非日常的な枠の中の純然たる「二者関係」であり、“moment of meeting” によって変容した関係を基盤として、新たな “present moment” を繰り返し、“now moment” から “moment of meeting”・・・と変容を繰り返す、治療が進んでいくと考えられるが、学校教育における、教師—子ども関係はセラピストクライアント関係のような純然たる「二者関係」ではなく、全く同じプロセスとして語ることは難しいと思われる。学校における教師と子どもの関係は、構造化された日常の中での教師—集団の中の子どもの関係性を基盤に、基本的生活習慣の育成、教科内容の習得、集団の成熟という教育の目的に向かって進んでいくというものであり、心理療法の枠組みとは大きく異なる。このような枠組みの中で、「出あい」によって教師と子どもの関係性における暗黙の知が変容し、新たな関係が構築されるということについてどのように考えればよいだろうか。

前述の松本は、馴染みと思っていた患者に一瞬の意外性を感じる“接線の触れ合い”によって、“治そうとする” “何とか治さなければならない” という治療強迫とでもいうべき桎梏から自由になることが出来、それは治療者にとって“快い” 体験であると述べている。前述の樽見も、“素の時間” を治療者と患者が共有することが増えていけば、治療の看板に左右されない、両者の間の新たな経路が生まれてくると述べる。学校における「出あい」も、教師と子どもの関係、「教育するもの—されるもの」という関係を変容するというよりは、「教育するもの—されるもの」とは異なる新たな別の関係性を両者の間に生み出すものなのではないだろうか。成田(2005)は、心理療法的関係は“A 関係” “B 関係” という二重性があるとしている。“A 関係” とは、意識的、現実的、理性的、現在的、職業的、契約的關係であり、“B 関係” とは、無意識的、空想的、情緒的、個人的、転移・逆転移的關係であるとしており、心理療法家は、“A 関係”

“B 関係” の両方に目配りをしなければいけないと述べる。“A 関係” が見えなくなれば “B 関係” が両者の関係となり、それは治療という専門的営為ではなくなるが、“A 関係” のみに終始してしまえば、患者が深く蔵している問題は明らかにならず乗り越えられないとし、「心理療法家は A 関係を確立しその枠を守りつつ、そのなかで B 関係の発展を許し、自らもそこに組み入れられ、参加するのである。この二重の関係をいかに生きるかが心理療法家に課せられた課題である。」と述べている。「教育するもの—されるもの」といった学校教育における教師と子どもの関係は、成田が述べる“A 関係” といえる。この“A 関係” において教師は、現実原則に従って、意識的、理性的に子どもと関わり、教育の目標の達成や子どもの成長という方向に進んでいく必要がある。これが “B 関係” に替わってしまえば、それは学校教育という専門的行為ではなくなってしまう、プーバーが述べるように、「2 人はもはや教師と生徒という関係ではなくなってしまう。また、若手教員が子どもの心情に寄り添うあまり、一貫した学習や生活

規律の指導が出来ず学級崩壊状態になってしまう、授業や指導に「カウンセリングマインド」を全面的に取り入れることで、反対に子どもとの関係が表面的になってしまうといった例のように、“A 関係”やその枠組が確立されないところに“B 関係”を取り入れると、“A 関係”と“B 関係”の区別が曖昧となる。そして、心理臨床家の見方や理解、手法を取り入れた教師ではなく、心理臨床家のような教師になってしまう等、“A 関係”に“B 関係”が融合してしまうことにもなるだろう。その結果、教育関係、教育環境が破綻したり、“A 関係”“B 関係”のおのが持つ本来の意味が失われてしまうだろう。しかし、本稿で述べてきた「出あい」で生じるような“B 関係”は、成田も述べるように“A 関係”だけでは理解し、乗り越えられない教師と子どもとの間の関係を乗り越える力を持っており、教師も、“B 関係”を排除して“A 関係”のみを生きるというのではなく、この二重の関係に目を配り、両方を生き抜くことが必要となってくるのではないだろうか。“A 関係”という教育関係の文脈の中に“B 関係”を因果的に位置づけたり、“A 関係”で不足しているところを“B 関係”で補完するといったように、一方の関係の中にもう一方の関係を組み入れるのではない。教師が、子どもとの教育的関係に留まり、そこに「出あい」で生じた新しい関係を取り入れて、教育的関係を発展させるというのではなく、両方の関係を行き来しつつ、時には並置された二つの関係を俯瞰的に眺め、考える一、このように両方の関係、そしてそこに身を置くことに自覚的であることによって、「出あい」は捉えられ、「出あい」が二重の関係の構築への契機となるという意味を持つてくると言えるだろう。

冒頭の A ちゃんとの「出あい」の後、その「出あい」が学校教育という“A 関係”の中で再び触れられることはなく、また、再び「出あい」が生じることもなかった。A ちゃんと筆者は年度末まで“A 関係”を生きた。しかし、“A 関係”の日々の中、筆者は A ちゃんとの間に常に“B 関係”、あの「出あい」が漂っているように感じていた。それは、直接的に学校教育における二人の関係の不全や欠損を埋め合わせたり、課題を解決したりすることはなかったが、A ちゃんとの間に漂う「出あい」の存在によって、筆者は幾ばくかのゆとりと支えられているような感覚を持っていた。A ちゃんとの“A 関係”は、簡単なものではなかったが、“A 関係”とともに“B 関係”があるという感覚によって、筆者は“A 関係”に立ち続けられたように思う。

6. おわりに

本稿では、心理臨床、学校教育の場を軸に、これまで取り上げられてこなかった学校教育における教師と子どもの「出あい」について考察することによって、「出あい」の様相、「出あい」が持つ意味、「出あい」によって教師と子どもの関係性の暗黙の知が変容し、新たな関係性が構築されていくことが明らかになった。そして、新たに構築された関係性を、これまでの教育的関係の延長線上にはない新しく生まれた関係性として捉え、従来の教育的関係と二重の関係として、両方の関係を生き抜く必要があること、そうすることによって「出あい」は意味を持つてくるとの結論を得た。教育的関係と「出あい」によって新しく生まれた関係は、直線的に布置されるものではなく、一方の関係の文脈に他方の文脈に組み入れて、因果的に理解するものでもない。そうではなく、この2つの関係は、教師と子どもの間に、並列的に布置されるものであり、両者の関係を行き来し、両者の関係を全体的に眺めることによって、教師—子どもの関係や子ども理解において、新たな意味が見えてくるものなのではないだろうか。

学校においては、これまでこのような「出あい」については、目がむけられてこなかった。ブーバーは、教師と生徒が、“我”と“汝”として全体的人格者同士として出会うことによって、真の対話が生まれ、生徒は教師との「出あい」によって人格的に結びつき、それを通して、はじめて自らの素地に文化・知識や多くの価値を刻印していくことになるとし、教育における「出あい」の重要性を説いているが、それは、あくまでも教師と生徒としての出あいであることを強調している。関川(2016)は、このブーバーの教育論を元に、教師が援助者としての態度をとる時、自分と子どもとの間で実りある教育的出会いが生じるとし、教師の役割は、様々な世界との関わりを教師の人格のうちにいったん集約し、真に出会う関係の中で、子どもに伝達することであるとしている。「出あい」を教師と子どもの“我”―“汝”の関係と捉えた関川の考えは、子どもとの出会いの技法や教育的効果を追求しているこれまでの教育における「出あい」の捉え方とは異なるもののようのも思われるが、その目的は効果的な指導であり、これまでの教育における「出あい」の延長線上にあるもののように思われる。そうではなくて、これまでの教師―子どもという教育的関係の延長にはないものとしての「出あい」を重視していくことにより、さらに新たな関係が開けていくのではないだろうか。本稿では、瞬間的、偶発的な「出あい」が、教師―子どもの間に二重の関係を構築する契機となることは示されたが、「出あい」を単なる偶発時と捉えるだけではなく、これまでの教師―子どもの教育的関係の歴史性や文脈とどのような関連があるかという点に関しては、さらに探求していく必要があるだろう。

年々、心理臨床活動の場は、広がっている。面接室という限られた、守られた空間の中、二者関係で行われるといった従来の心理面接の枠を超え、集団の中で、ある程度明確な役割において心理臨床活動を行うことが増えてきた。例えばスクールカウンセラーは、学校という集団の中に入り、個別の子どもに出会っていく。もちろん、心理療法が必要で、面接室の枠の中へと入り、継続的に出会っていくケースもあるだろうが、集団の中での個々人と出会っていく活動も求められている。また、教師にとっても子どもに対して心理臨床的に関わること、理解していくことは今以上に必要となってくるだろう。心理臨床、教育という枠組みから外れたところで、それぞれの専門職として子どもとどのように出会い、「出あって」いくかということが大切になってくると思われる。面接のような、これまでの心理臨床の場を外れたところでも、臨床性を伴った二者の「出あい」が生じ得ること、そしてその「出あい」をどう生きるべきかが、本稿では示唆された。今後とも、学校教育において心理臨床的考え、関わりの重要性は増していくと考えられ、本稿で述べたような「出あい」について探求していくことは意味のあることであると思われる。

参考文献

赤坂憲雄(1992)：異人論序説．筑摩書房．

ボルノー著 峰島旭雄役 (1966)：実存哲学と教育学.理想社, P139-215

ボストン変化プロセス研究会著 丸太俊彦訳 (2011)：解釈を越えて - サイコセラピーにおける治療的变化プロセス - 岩崎学術出版社.

一丸藤太郎(2000)：事例との出会い．京都大学大学院教育学研究科真理教育相談室紀要.臨床心

理事例研究 27,P3-P4.

井上嘉孝(2010):「苦悩という体験の心理学的理解—村上春樹『トニー滝谷』における出会いと孤独を手掛かりとして」. 矢野智司他(編)(2010): 臨床の知 臨床心理学と教育人間学からの問い. 創元社,P141-P160.

岩井有香(2015):京都大学大学院教育学研究科修士論文(未公刊).

神田橋條治(1984): 精神科診断面接のコツ. 第3章面接について.共伸舎.P37-P51.

加藤辰雄(2001): 得意なもので勝負する. 子どもと教育, 4, P28-P33.

春日井敏之(2002): 希望としての教育—親・子どもの・教師の出会い直し.三学出版.

河合隼雄(1992): 心理療法序説. 第四章心理療法と教育. 岩波書店,P83-P104.

河合俊雄(2000): イニシエーションにおける没入と否定. 河合隼雄編(2000)「心理療法とイニシエーション」. 岩波書店,P19-P60.

河合俊雄(2014):『遠野物語』と意識の成立. 河合俊雄・赤坂憲雄編(2014):「遠野物語鎮魂と遭遇」. 岩波書店, P31-P54.

川寄克哲(1998): 心理療法場面において生起する<ハプニング>の意義に関して. 学習院大学文学部研究年報, 45, P239-P258.

児玉恵美(2006):「境界」. 日常臨床語辞典. 誠信書房, P147-P150.

國分康孝(1996): エンカウンターで学級が変わる—グループ体験を生かした楽しい学級づくり一.図書文化社.

前川美行(2010): 心理療法における偶発事—破壊性と力.創元社.

松本雅彦(1987):「治すこと」と「治ること」と—分裂病治療における「接線的ふれあい」について—土居健郎編(1987): 分れる病の精神病理 16,東京大学出版会 P139-P166.

マルティン・ブーバー著 植田重雄訳(1979) 我と汝・対話.岩波書店.

水上和夫(2016): スペシャリスト直伝! 小学校エンカウンターで学級づくりの極意.明治図書.

成田善弘(2005): 治療関係と面接—他者と出会うということ—.金剛出版.

荻野恒一(1979): 故郷喪失の時代. 北斗出版, P39-P40.

ロブ・アンダーソン、ケネス・N・シスナ編著、山田邦男監訳(2007): ブーバー ロジャーズ対話 - 解説つき新版 -.春秋社.

関川悦雄(2016): ブーバー教育論の研究 - 教師と子どもの教育関係を軸に -.風間書房.

田中崇恵(2013): “異”なるものをめぐる心理臨床学的研究. 京都大学教育学研究科博士学位論文.

樽味伸(2006): 慢性期病者の「素の時間」.樽味伸(2006): 臨床の記述と「義」—樽味伸論文集. 星和書店,P23-P42.

渡辺恵津子(2001):「安心の居場所づくりは自己表現から」. 子どもと教育, 4, P6-P10.

(心理臨床学講座 博士後期課程2回生)

(受稿 2017 年 8 月 30 日、改稿 2017 年 11 月 19 日、受理 2017 年 12 月 20 日)

「出会い」とその臨床性について

—その意味ともたらすものの探求—

岩井 有香

本稿では、学校教育の場において、これまで取り上げられてこなかった「出あい」について心理臨床的に考察した。この「出あい」は、これまで「encounter」という言葉で表されてきた「出会い」とは違い、瞬間的で、予期せず偶然生じ、驚きを伴うものであり、何か新しいものがひらけるような感じを受けるが、それを学校教育の文脈で理解し、意識的に扱うことは難しい。しかし、本稿により「出あい」は、教師と子どもの関係性に変容していく契機となることが明らかになった。そして、「出あい」によって生じた関係性を、これまでの関係の延長線上にはない新しく生まれた関係として捉え、教師は、この新しい関係と従来の教育的関係を“二重の関係”として生き抜く必要があること、そうすることによって「出あい」は意味を持つてくるとの結論を得た。この「出あい」においては、「出あい」が生じた瞬間に身を置き、とどまり、「出あい」の後も「出あい」について考え、抱え続けるという「出あい」にひらかれた態度が大切であるといえる。

Characteristics of “Deai” in Clinical Psychology: Exploration of its Meaning and Impact on Relationship between Teacher and Student

IWAI Yuka

This paper discusses the characteristics of “Deai (meaning a “meeting”) at school, which has not been discussed previously in light of clinical psychology. “Deai” occurs momentarily and unexpectedly; and therefore surprises others and brings something new into their mind. These characteristics are difficult to understand and adopt consciously in the field of school education. However, this paper shows that “Deai” alters the relationship the relationship between teacher and student. Therefore, teachers are required to consider the relationship created by “Deai” as a new one and live in dual relationships; the traditional relationship with an educational manner and a new relationship. At the moment of “Deai”, it is important to place oneself in that moment, stay there and hold the sense of “Deai” by thinking it over.

キーワード： 出あい、瞬間、偶然、関係性変容、二重の関係、学校教育

Keywords: Deai, instance, unexpected, change relationship, dual relationship, school education